

土壌地理学序説

浅海重夫

私が土壌を専攻するようになったのは、大学を卒業して五年も経ってからである。旧制の学部在学中に多田先生の土壌学を聴講したはずだったが、卒業後西ヶ原の農林省農事試験場土性部（今の農業技術研究所化学部）に勤務することになってはじめて、少し本気で土壌学の教科書でもよんでみようかという気になった。とくに望んだ職場ではなく、その時そういうくちがあつたことと、そのほかにくちがなかつたことが、此の就職の理由であつた。試験場では、土壌の調査単位をきめたり、土壌区の境界を図上でひくために地形区分が役立つからというので、私はもつぱら五万の地図で地形区分だけをおこなつていればよかつたから、時おり土壌サンプルの風乾とやらで泥を手でつぶしひろげる手伝いをしながら、きたないことをする商売もあつたものだと思つていた。その横東大生というのは泥くさいものと世間の相場がさまつていたが、卒業して本当に泥くさくなることは因果なことだとなつた。

ある日お茶の水女子大学の教授で、私の先輩の松井先生が試験場にこられこゝにいて本がよめますかときかれたときに、私は一般と泥そのものに縁なく道を歩むことになつたのである。妙なもので農林省にいた時は、地形学をそのまいつづけてゆくいわけは応用地形の仕事をし、文部教官となつて地理学教室に戻つてから、専攻を土壌地理に転じたわけである。土壌調査の方法も分析のまねごとでも、農林省時代に見よう見まねで何となく覚えただけのもので、大学の教壇で教えるようなしるものではなく、その方法も知らない。しかし調査とか分析そのものは学問ではなく一種のテクニックだから、フィールドや実験室で先輩や同僚と一緒にやりながら覚えるのが、案外一番よいのかもしれない。試験場での私の研究室の室長は横井さんという開拓地や低位生産地の土壌研究のベテランであつたが、忘れもしないある年の年末休暇中に、急な仕事があるからと呼び出され、暖房もない寒々とした部屋で咳をしながら地図をひろげて必死になつてると、横井さんを訪ねてきた人があり周りでワヤワヤと雑談がけしつた。訪問者は何か大きな楽器を持つていたようだったが、そのうちに雑談は土壌の話かと思つるとまた別の話になり、遂にその楽器の話になつて、ケースからとり出したギターをこどもあろうに横井さんがチャラチャラひき出した。ひとに仕事をさせておいて何ということ

であるかと内心おだやかでなかったのは当然だが、横井さんのギターがまことに達者なものと、元来きれいなものでなしまあ致し方ないと思っあきらめた。そのときギターのひき語りにも横井さんの話していた火山灰と赤色土に関する見解（褐色のロームは赤色土風化がおこなわれた時期よりあとのもので現存の赤色土は化石土なのだという考え）が、ふしぎにいつまでも強い印象となつて、あの寒かつた年の暮を今でも時々思い出す。

いろいろほかにも理由があつたが、ともかく私がお茶大に転職してから、土壌地理学なる講義と実習がこの教室にも始められ、その結果いく人かの諸機が泥にまみれ、砂ほこりを吸い、寒い冬にはやわ肌を荒らし、暑い夏には汗をぬぐいもやらで、泥くさくなつてしまつたのはまことにお気の毒というほかはない。何といつても土壌調査におけるボーリングの労力は、非女性的な最たるものとみとめざるをえない。モーター付オートボーラーのような器具が使えれば能率的だが、たといそれが考案されても経費と運搬の問題で行きなやむだろう。本職の農林省関係には、意外に穴掘りの機械化を考える人がいないが、それは労力に不便を感じないからであるらしい。一人ぼつちの調査のとき、泥をいじるのと野帳に記入することはどうしても両立しない。雨でも降つてこられたら全然お手あげである。窮余の策として単独調査の場合、データーをテープにふきこむことを思いつき、去年の津軽調査で試みた。よる宿の部屋でそれをきいてノートをとるのだが、はつきりしない所があつて思はず、え？なに？ときゝ返してひとり苦笑したりした。

農林省時代には、今は退職された鴨下さんや横井さんの仕事をしながら、多くの人から土壌の生成や分類についての考えをうかがう機会を得たが、土壌生成における地形因子の役割について土壌学者の認識はさまざまである。いな、土壌そのものの問題についても、解釈に一致した到達点のみとめ難い傾向さえある。土壌は地球上の自然物のうち最も複雑な環境因子の働きかけをうけているといえよう。土壌とはわからないものと口ぐせのように云われた横井さんは、大して広くもない視野に立つてある分析をして何か結論を出して、わかつたやうなつもりになることを常にきびしくいましめられた。実験や実証のできないために、研究者の視点と心象の具合で全く別の結論が出されるやうなことがあつては、自然科学とは云えないが、土壌学はまだそのような面の残された学問の一つではなからうか。土壌がわからずに土壌地理学もないものだが、世の中の学問だつてそうわかつたもの許りでもなからうから、まあ手がけたことは少しづつ気長くやつて様子を見ることにしよう。泥いじりのはじまつたいきさつはざつとこのような次第である。